

論文

新村苑子『葦辺の母子 新潟水俣病短編小説集Ⅱ』について

About Shinmura Sonoko's *Mother and Son in a field of Reeds*
(Short Stories vol. 2 about Niigata Minamata Disease)

後藤 岩奈¹
GOTO Iwana

1 はじめに

新潟市在住の作家新村苑子氏は2冊の「新潟水俣病短編小説集」を出版している。2012年の『律子の舟 新潟水俣病短編小説集Ⅰ』、2015年の『葦辺の母子 新潟水俣病短編小説集Ⅱ』である。いずれも新潟県柏崎市の出版社である玄文社から出版されている。

筆者が新村苑子氏の小説に触れた直接のきっかけは、2015年12月、新潟水俣病第3次訴訟の支援をされている方から、新村氏の小説の書評を書いて地元紙『新潟日報』の書評欄「新潟の一冊」で紹介することを依頼されて、新村氏の『葦辺の母子』を読んだことであった。

書評の執筆後、もう一冊の『律子の舟』も読んだのだが、いずれの小説集にも、新潟水俣病の被害を受けた人たち、およびその周囲の人たちの内面が細かく描写されており、筆者はその登場人物たちが「愛おしく」感じられ、登場人物たちに感情移入してしまい、思わずその作品の世界にのめり込んでしまった。

本稿は、国際地域研究会編『国際地域研究論集』第10号(2019)所収の拙稿「新村苑子『律子の舟 新潟水俣病短編小説集Ⅰ』について」(以下、「後藤(2019)」と略記)に引き続き、新村氏の二冊目の小説集『葦辺の母子』の作品に絞って、その内容を要約紹介し、作品に見られる特徴や傾向、その創作の意味等について、述べてみることにする。

なお本稿は、2019年1月6～7日、熊本県水俣市の水俣市公民館において開催された、熊本学園大学水俣学研究センター主催の「第14回水俣病事件研究交流集会」における筆者の報告に、加筆修正したものである。

さらに2018年8月13日、新潟市総合福祉会館において開催された、新潟水俣病阿賀野患者会主催の「新村苑子著『新潟水俣病短編小説集』を読み解くゼミナールPARTⅡ」での討論も参考にした。

2 作者、作品について

新村苑子氏は1937年、京都の出身で、1945年に神奈川から新潟に移る。1998年から「文芸驢馬」の同人、2010年からは「北方文学」の同人となる。著書に『瓢箪』(驢馬出版、2006年)がある。新潟水俣病をテーマとした作品は2010年から書き始めている²。現在も同テーマの作品の執筆を続けている。

『葦辺の母子 新潟水俣病短編小説集Ⅱ』には、「葦辺の母子」、「母の秘密」、「歲月」、「ふたり」、「川の記憶」、「長い留守」、「手紙」の7編の短編小説が収められている。このうち、「葦辺の母子」、

「ふたり」、「長い留守」を中心に見てゆくことにする。

2-1 「葦辺の母子」

まず、作品の冒頭部分を引用してみる。

[引用1]

昭和四十七年十一月下旬の夜半、若い母親有希子はよく寝入っている息子保幸をママコートにくるみ、負いひもで自分の体にぐるぐる巻きにして抱え、阿賀野川の岸辺に立った。もし、その姿を目撃した者がいたとしたら、彼女は何の迷いもなく、歩を進めて土手を下り、立ち枯れたままの葦の岸辺から川の中に入って行ったと証言しただろう。³

有希子の父浩一郎は、新潟県五泉市の小学校の校長をしていた。ある朝、有希子が息子の保幸を連れて実家を訪ねて来る。彼女は頬がこけ、目に生彩もなかった。

息子の保幸は、生まれてから口がきけなかった。村の上野病院で診て貰ったが、先天性の小児麻痺だと言われる。有希子と彼女の両親は、大学病院で診て貰いたのだが、それが姑の薫子^{しげこ}には気に入らない。有希子の両親には水俣病の症状があり、彼らは孫の保幸にも、その気があるのではないかと心配していた。浩一郎は自分で本で調べて、熊本では、胎児性水俣病というものがあると知る。浩一郎は、有希子の夫である満に、保幸の精密検査をさせて欲しいと伝えるが、満は、自分の母の考えを気にして、消極的である。

姑の薫子は、みな学歴のある有希子の家庭が苦手であった。さらに息子の結婚後、この家族が水俣病だと知って、病気には関わりあいたくなかった。また水俣病は遺伝するもの（血筋）だと思っていた。そして孫の保幸は小児麻痺であると言い張って、水俣病の検査を受けさせたくなかった。有希子の夫の満は、自分の母親とは争いたくなかった。

[引用2]

有希子が生まれ育った石津の村からは、何人もの水俣病患者が出ているという話は聞いたことがあった。だが、有希子の家は川に関係のある職業ではなかった。両親は二人とも小学校の教師だ。有希子の兄も大学を出て新潟市内に勤めている。仲人も水俣病のみの字も触れなかった。騙されたとはいわない。だが、晴天の霹靂ではあった。

保幸の体が普通でないと分かったと、母親の薫子は有希子が不在なのを確かめてから、その原因は、おら家の血筋ではない、と満に強い口調で言い切った。

「どういう意味でえ？」

「どういう意味だか？」

お前はこの意味が分からねて言うんか。母親の目は言葉以上の含みを漲らせて、半ば見下すように満に向けられていた。母親の言いたいことが分からないわけではなかった。ただ、こんな言葉を露骨に息子に投げつけた、その真意が理解できなかったのだ。まさか本気で言うてるわけではあるまいが、これだけは言わなければと口を切った。

「脳性小児麻痺は血筋に関係があるわけはねえろ、病気なんでえ、馬鹿言うなね」

「どっちが馬鹿だやら！」

「なんべんも言うるも、あれは病気なんでえ、病気なんだすけの！」

母親は、悩み続けている有希子を、そして、保幸を切っているのだ。お前は私の子だが、保幸は有希子の子だ、あっちの血を受け継いでいる子だ、と暗に言っているのだ。有希子は一人で保幸を生んだのか。話にならない。そう満が思うように、薫子もまた自分の意見に耳を貸さない満に、業を煮やしていた。

彼はそれ以上、母親と口論はしたくなかった。とにかく、家の中で言い合いは避けたかった。そんな自分に、有希子は真意は知らないまま、不満らしいということも何となく読めていたが、おれがついてるんだから、安心してれと言えない自分にうんざりしていた。⁴

そして有希子の父浩一郎さえも、自分の学校の仕事の多忙さで、有希子に対応できずにいた。有希子は、一刻も早く大学病院で精密検査を受けさせたかったが、誰にも本心を言えず、理解してもらえず、孤立してゆく。そしてある決意をする。

[引用3]

私が一人で行くと言った時止めたくせに、お父さんが休まんねて言うてっすけ、私が行くと、なぜ言ってくれないんだろう。一つ峠を越すとまた峠。越されない峠だとは思えないが、越されないものになっているだけだ。行く行くと言いつづけていれば、行くまでの日にちをのぼしておける。お母さんはお父さんをせつつくだけ。せつつかれてるお父さんだって、いざとなれば、あそこは鬼門なんだろうか。夫も父も、そして母も気持ちは充分あるのだと意志表示はするが、動いてくれない。みんなあそこで知った顔に会うのが嫌なのだ、きつと。

いいよね、やっちゃん、ママと二人で行こうね。ママも一緒に診て貰うんだよ。ママは誰に会ったって平気だよ。誰よりもやっちゃんの味方だもんね！⁵

実家にいたはずの有希子が、いなくなってしまう。家族は彼女を探す、阿賀野川の土手に彼女の車があるのが見つかる。有希子と保幸の遺体が発見され、また有希子のお腹の中には、二人目の子供もいた。夫の満、両家の親たちは、後悔の念にとらわれる。自分たちは、自分の都合だけを考えて、有希子のことを考えられていなかった…と。

二か月後のある日曜日、満は、浩一郎と篤子を訪ね、夢の中に有希子が出て来たことを告げる。

[引用4]

前の時と同じ格好で、保幸は有希子の腹の上で笑い転げてんです。有希子がどんげな顔をしてたかは、分かりませんでした。でも、二人でじゃれ合って笑い転げてるのは分かりました。長々と笑い転げてんです。おれが、保幸、パパのことも仲間に入れてくれやみてなこと言うたろも、いっくら呼んでも二人とも目も動かさず、おれの方なんか見ねんです。有希子は笑いながら保幸の顔を見てるのは分かりました。おれのことなんて無視して、二人は顔をくつつけるようにして笑い転げてて、ほら、パパが来たんで、やっちゃんとなんべん言うても駄目でした。なんだか、仲間はずれにさったみてで、夢の中だつてに、めっぼうさびして……、(中略)そして、おれなりに考えて、今度同じ夢を見た時、有希子と顔を合わせられるように、あれが一番願っていたことをしようと思いました。保幸の検査をして貰いに行きます。借りました本に、臍の緒で分かると思いましたすけ、明日、休みを取って行ってきます」⁶

満は、亡くなった息子の保幸の臍の緒の検査をする決心をしたことを告げるのだった。

2-2 「ふたり」

ある一人の女性が、一人で心の中で語っていた。その女性の名前は昭子^{あきこ}といい、亡くなった友人の小嶋富美^{ふみ}の7回忌と呼ばれ、その4日後に、心の中で富美に語りかけていたのであった。昭子は今日、新聞を読んだという。2004年10月、熊本と大阪の訴訟である関西訴訟の最高裁判決が出て、その記事であった。

昭子と富美は同じ村の生まれで、小学校の同級生であった。昭子は貧しい家庭の出身で、日々の労働に追われて小学校も休みがちで、小学校を出てからは隣村に子守に出されたため、字が書けなかった。富美は村の大宅^{おおやけ}（農村内の比較的豊かな家）の家庭の出身で、中学校を出ると新津の女学校へすすみ、東京の家政専門学校へ行った。

その後、昭子と富美は、偶然に村の道で会い、再会するが、昭子は富美に対して劣等感を抱いており、できれば話をしたくないと思っていた。富美は、昭子が同じ同級生であった良吉とまもなく結婚することを知っていて、「時間があつたら和裁を教えてあげる」と、友だち付き合いを誘う。

昭子が富美の誘いに応じたのは、昭子の末の娘順子が中学生になってからだだった。昭子は40を過ぎたころから、水俣病の症状が出てくる。夫の良吉、その親たちも同じ症状であるという。そして富美も症状が現れる。

富美から茶飲みに誘われた昭子は、富美とその夫の誠三から、水俣病の患者の認定のための申請書を出さないか、と言われた。昭子は、小学校を出てから隣村に子守に出されたため字が書けず、またお上に物申すことにも躊躇^{ためら}があったが、自分が本当に水俣病かどうか知りたくて、誠三に助けて貰いながら申請書を書いて出すことにする。苦勞^{まんま}して申請書を書き上げるが、夫の良吉は「おらっては何十年もお上から飯食^まわして貰^まうたんだすけ、楯突^たくげなことは出来ねんだ」と言って、申請書を出さなかった。

富美の家を訪ねた昭子は、水俣病の症状について語り合う。「にわかにあの病気が身近にあったと思うと、何だか悪^{おっかね}くなってさ」。昭子は富美の正直な気持ちを聞いて、こんなに学のある人でもおっかねえと言うんだ、と思って、安堵する。

新潟水俣病の第二次訴訟の裁判は、1982年（昭和57年）に始まる。富美と誠三の夫婦は裁判の仲間に入るが、昭子は良吉との関係を考えて、裁判の仲間には入らなかった。昭子は申請書を出して、富美夫婦と一緒に何回も大学病院に通うが、病院では医師たちに皮肉や嫌味を言われる。二年たつて、三人とも認定を棄却される。裁判に参加した富美と誠三夫婦に対する人の陰口も耳に入る。「いついつ二人して出かけたとか、今日も出かけたが、あれで患者だてんだが、不思議だのう、丈夫な者^{もん}だつてや、ああ毎日^{めえんち}のように出て歩かんねてば」「村でも大宅の人がよりによって夫婦揃^{そろ}て、国から金を取ろうつてや仲間になった」。誠三は昭子に、「金が欲してこんげなこどしてっかんでねえすげの。分^わがってくれっけ？」と言うが、昭子は内心、仲間にならなくてよかったと思う。

10年余りを要して、1996年（平成8年）2月、第二次訴訟は最高裁で和解が成立した。裁判に参加した原告の人々の中にも、様々な思いがあった。昭子は、医療手帳を見るたびに思うことがあった。昭子はある人から、昭子は裁判に参加しなかったのに、和解で医療手帳を貰ったことについて、富美が陰口を言っていたことを聞く。

【引用5】 [] は筆者（後藤）による補足説明。

「ほんね、裁判の仲間になるんだすげと、おとと [亭主。夫の誠三] が親切に検査に連れて行ってくれたり、[昭子が] 申請書の書き方が分からねって言うもんで、一から教えてやってさ、それだてがんに裁判の仲間にはならねて頑として入らんかったんだでえ。おととはいろいろとわけ

もあつてや、て分かりのいいこと言うてたろも、こっちは呆れてしもて」(中略)

「原告になった患者は、手分けして陳情に行ったり、人が沢山行き来する古町の十字路で、署名活動をした時もそうだろも、東京へだって何べん行ったやら。九州までも行ったんでえ。ノーシンのサロンパスだの睡眠薬だの、何日分も持ってさ。嫌な思いも沢山した。良いこともあった。それだんがあんげに長々と裁判をして苦労した者と、仲間に入らんかった者がおんなじ条件で医療手帳を貰たんだけすけの。和解の条件ではあつたろもさ。どんげな顔して受け取ったやら。想像もつかんてば」⁷

裁判に参加した人と、参加しなかった人。和解後に、どちらも医療手帳を貰えた。それについては、双方の思い、感情があった。

その後、誠三が亡くなると富美はボケが始まり、一人娘の晶子の世話になるようになり、7年前に亡くなった。現在昭子は末娘の順子に面倒を見てもらっている。昭子は、「また、いい話聞いたら教えてください」と、心の中で富美に語る。

2-3 「長い留守」

秋子は、夫の昌平の「浮気」を理由に、家を出て、20年の時間がたった。その昌平が、新潟水俣病患者として支援者の集会で、語り部として、自らを語るという。

友人渡辺寿美の勧めで、秋子は洪々、顔を帽子とメガネ、マスクで隠して、講演会の会場に足を運ぶ。秋子は、昌平がそんな病気だとは知らなかった。

20年前のこと、秋子は、夕食後に昌平がいなくなっていることに気づく。近所の人たちの間では、昌平が飲み屋の女の元にかよっている、と噂されていた。

[引用6]

しかし、噂がまったく根拠が無いどころか、女が絡んでいると聞けば、秋子の方から真偽を確かめる気にはなれなかった。むらむらと嫉妬心と裏切られたという落ち込みに振り回された。その一方で、

「ねえ、嘘だよ、人があんたが浮気してるって言うてるろも、違うよね、違うと言って」

と少し甘えて言えたらどんなにいいだろうと、自分が素直でなく意地を張り通している強情な性格にうんざりもしていた。矜持が許さないのなら、それにおっ被さってくるリスクがどんなに大きくても泣き言はみっともない。甘えたりしなだれたりしてまで真偽を掴まなくてもいいと、内心で揺れたり嘆いたりも経験した。いつの間にか、まさかとの打ち消しは薄れ、噂に負けている自分に気づきもしなかった。⁸

そして、秋子は家を出て行ってしまう。昌平は、秋子はすぐに戻ると思っていたが、その後、20年がたってしまった。

講演が終わると、昌平はとうとう秋子を掴まえて、昼食を共にする。昌平には、実は、人に言えないある事実があった。

[引用7]

あの当時、自分の体に有機水銀なんて毒が溜まってて、おれの場合それが原因で四十前の体を腑抜けにさっしてもたなんて、どうして思われようば。お前だてや夢にも思わんかったろが。余

所ん人みてに、手足がしびれるとか、頭痛めにならんで、なんで男として使い物にならねようになつたか。余所ん人もその気があるんか、聞いたことはねえなあ。人並みに足が突つて痛くて夜中に目が覚めるようになったんは、その大分後なんだ。情けねえ気持ちをほぐらすためと、その間は秋子を忘れていられるのは、あそこしかねがったんだ。あの一杯飲み屋の女将の所へ通う振りをしてたんだ。実際は女将の亭主と将棋を指してたんだ。どっちも腕の方はあんま良かったるも、どっちもどっちだすけ長持ちしたな。飽きもしねでようやったわや。

年増の女将にうつつを抜かしてる馬鹿男のふりをしてても、あの男は使いもんにならねなつたやと、小馬鹿にさったり見下げられて、役立たずと触れ回られとねがった。人の口はおっかねえ。何よりも男失格だてやなんて噂になりとねがったんだ。それさえ言わんねば、何を言いふらさつてものはずれの噂話なんか気にもしねかった。⁹

秋子と昌平の二人は、激しい雨風の中、新潟市内を流れる信濃川にかかる、萬代橋を渡る。

[引用8]

「私はけりを付けようと思って来たんだから、この場でうんと言うてくれればいいんだけど」
「分がった分がった。お前の言うことは分がってる。それも家に帰ってからだ」
「今更帰らないから。優子だつてどう思うか、周りの目だつてあるし」
「周りの目なんて気にすんな。何か言わつたら、あははちいっと長かつたろっかね、つて言うてればいいんだ。いっぺん言われれば二度言う者はいね。そのうちに誰も言わんなる。人の口なんてそんげなもんだわや」
「兎に角行かない、私は。優子に会い心構えもしてないし」
「優子なあ。お前に沢山言うて聞かせることがあつたんだ。兎に角二十年近く溜まつた話なんだすけ、立ち話で終わるわけがねえろうが」
「私、そんな話聞かなくていいから」¹⁰

そうして昌平は、秋子をタクシーに押し込むように乗せるのだった。

3 作品から見られること

作品から見られることを述べてみる。

まず「葦辺の母子」について。有希子の周りの人々は、自分の都合ばかり考えて、有希子の「思い」を考えられていなかった。小学校の校長職で多忙の父浩一郎、周囲を気にして有希子を抑える母篤子、水俣病に関わりあいたくない義母の薫子、母薫子の考えを気にする夫の満。そして病気に対するきちんとした知識が無いなどの病気への無理解、学歴の有無などの家庭環境の違いなどを背景に、有希子を追い込んでゆくことになる。同じく新村氏の作品である「律子の舟」と同様、この作品でも、主人公の有希子は自ら亡くなってしまふ。そのため「悲しいお話」、「悲劇」とも言えるかと思われる。しかし筆者は作品を読んでいて、それがあまり「暗く」「悲惨」には感じられなかった。それは、有希子と保幸が亡くなることによって、周りの者たちは自分自身を見つめ直し、目覚めるといふか、自分たちに欠けていたものに気づくのである。まるで有希子と保幸によって教えられるように。そこがこの悲しい作品の「希望」のように思われる。

「ふたり」について。裁判に参加した人と参加しなかった人、いずれも「和解」後に医療手帳を貰えた。そのため双方の思い、感情があった。以下は、筆者が実際に水俣病の患者さんが語るのを聞いたことであるが、その患者さんは第2次訴訟に参加した人であるが、1996年に訴訟が「和解」したあと、同じ集落の人で、水俣病の症状があるけれど裁判に参加しなかった人から「医療手帳は国や県から貰ったんだ。お前たちのおかげじゃない」と言われて、とても憤慨して話をされていたのを聞いたことがある¹¹。

この作品では、裁判に参加しなくて医療手帳を貰った人の側の立場で書かれていて、そちらの側にも、それ相応の事情や背景があったのだ、という設定となっている。

昭子と富美は、出身の家庭の身分の違い、経済的な貧富の差、学歴の違いなどから、同じ水俣病の症状がありつつも、裁判への参加にも違いがあり、そのため嫌な思いをしたり、行き違いもあった。それでも昭子は、「ばったり道でお前さんに会わなかったら、おらの一生はもっと世間が狭えかったと思うし、(中略)仲良うして貰てほんね有り難かったですてね」、病気がきっかけで、分け隔てなく話すようになった、「お前さんもおれも大抵でねがった一生だったろも、それでも生きてるてがん[こと]はいいもんだと思いましたわね。お前さんもそう思いなさるろうね」「また、いい話聞いたら教えてください」と、心の中で富美に語りかける。水俣病になったことは不幸なことであるが、この病気になったことで、時としてすれ違い対立しつつも、一緒に行動することで、身分や家庭環境の違い、経済上の格差や学歴の違いを超えて、人としてのつながりを持つことができた、という設定となっている。

「長い留守」について。昌平は水俣病についての講演を引き受ける。水俣病の語り部さんは、自分の病気の苦しみや辛さなどの実情を、少しでも多くの人に理解して、知って欲しい、などの理由で語りを行なうことが多いと思われるが、この作品中の昌平は、それもあるとは思われるが、一方で、自分の元から去って行った妻の秋子を引きずり出すというか、おびき出して、自分のこれまでを知って欲しいという、私的な、プライベートな理由で語り部を引き受けているように描かれているところが特徴的である。

筆者はこの作品を一読したときには、昌平のセリフの中にある「男として使い物にならねかった」とは、「仕事も家事もうまくできないダメな男」という意味かと思っていたが、新潟水俣病阿賀野患者会の酢山省三さんのご指摘で分かったのであるが、水俣病の症状の一つとして、「夫婦生活の障害」、「性的な機能の障害」がある、とのことであった。この点について、作者の新村苑子氏は、長年患者さんの診察を続けている新潟市中央区の沼垂診療所の関川智子医師から、患者さんにはこのような症状もあると伺って、小説の題材にした、とのことであった¹²。

この作品は、全体が謎解きのようになっていて、読み進めていくと、その謎が解けてゆき、事実が分かってくるような構成になっていて、ストーリー性、物語性があるように思われ、「面白い」という表現は語弊があるかもしれないが、小説としての「面白さ」があると思われる¹³。

また新村氏の作品は、風景の描写はあまり多くないが、この作品は、情景が目には浮かび易く、特にラストの信濃川にかかる萬代橋の場面などが、そうである。

小説集『葦辺の母子』には、このほかに4編の作品が収められている。「母の秘密」では、亡くなった母が、かつて大崎の巫女さんの所に行っていたことを知った悠子は、母がなぜ、なんのためにそんな所に行ったのか驚き、訝る。「歲月」では、会社の親睦会で会津若松の温泉に宿泊した秀和は、旅館の女将が彼を避けるように姿を消したのを見て、数十年前のある出来事を思い出す。「手紙」では、東京の大学に通う女子学生千里が、父親からの電話で、上京した祖母の面倒を頼まれる。祖母はなぜ東京に来たのか、千里は考え、これまで自分の知らなかった家族の事実を知る。そして

祖母の思い、自分の思いを、昭和電工本社の社長宛に手紙を書くことになる。

4 まとめ

拙稿「後藤 (2019)」と重複する内容の箇所もあるが、新村氏の作品から見られるものを、以下の6点に整理してみた。

1、患者さんと、その周囲の人々の思いが細かく書き込まれている。特に女性の細やかな心理が書かれている。[→引用3]「葦辺の母子」では、有希子の周囲の人々がいずれも自分の都合を優先して、有希子の「思い」に応えることができず、有希子がある決意をするに至るまでの心理状態などがそうである。これは「律子の舟」の律子の心理描写にも重なるものがある。

2、結果として差別的なことをしてしまう側の心理も書かれている。[→引用2]「葦辺の母子」の薫子は、みな学歴をもつ有希子の一家が苦手であり、さらに自分の息子可愛さに、「血筋」を理由に、孫の保幸の病状に真剣に向かい合おうとしない。自分の子供可愛さという点では、『律子の舟』所収の「白い水」の静子の行動にも似たところがある。

3、描かれているのは、悲しい出来事、悲しい話であるが、亡くなった人が、周りの者に気づかせる、目覚めさせる、亡くなった人が教えてくれる。周りの者は自分を見つめ直すことになる。「死」と「生」を一体として見ている。[→引用4]「葦辺の母子」の満は、有希子と保幸の死後、夢の中に有希子と保幸が出てくるが、楽しそうにしている二人に相手にしてもらえず、寂しい思いをする。そして生前の有希子と保幸を思い返すこととなり、有希子の「思い」に考えが至る。そして保幸の臍の緒の検査をする決意をする。これは『律子の舟』所収の「決意」において、律子の弟明が、のちに水俣病の患者さんの掘り起こしをして訴訟に参加すること、また同じく『律子の舟』所収の「邂逅」における、親から律子と別れさせられた、律子の元の恋人である雄一のその後とも相通じるものがある。

4、同じ症状をもつ人でも、家庭の経済状況、学歴などの格差から、身の振り方や行動に違いが出てくる。またそれからくる「医療手帳」に対する思いにも違いが出てくる。→[引用5]「ふたり」の昭子と富美の身の振り方がそうである。

5、「長い留守」では、「夫婦生活の障害」、「性的な機能の障害」の問題が書かれている。→[引用7]

6、「手紙」では、東京の大学に通う女子学生千里が、水俣病である祖母の思い、またそれに対する自分の思いを昭和電工の社長宛てに手紙で書くことになるが、これは次世代の成長を描いたものともいえよう。それは『律子の舟』所収の「兄の声」の公夫、前述の「決意」の明の行動ともつながるものがある。

以下、「後藤 (2019)」の「まとめ」でも述べたことであるが、『葦辺の母子』の作品にも当てはまることなので、本稿でも再度述べておくことにする。

水俣病の問題を理解しようとするのであれば、その当事者である患者、被害者の方々の証言や記録に触れることがまず第一であり、不可欠であると思われる。しかし、当事者であるが故に、どうしても人に語れない事、口外できない、公表できないこと、また「言っても、人には分かってもらえないのではないか」と思うことも多くあると思われる。新村氏は、それを創作(想像)、フィクションという方法で表現し、伝えようとしている。それは創作、フィクションであるからこそできる、という面もあるのではないと思われる。

水俣病問題を知るには、患者や被害者の方々の語りや証言に触れ、さらに、公表できない多くの

被害者の人たちの胸の内に、思いを馳せることも大切だと思われる。

新村氏は2015年の『葦辺の母子』の出版以降も新潟水俣病を題材とした作品を書き続けている。『北方文学』78号(2018年11月)誌上に最新作である「新しい朝」を発表している。今後もその活動が期待される。

附録：「新潟弁→標準語」対照表

[引用2]

「～でえ？」→「～だ?」。「分からねて言うんか」→「分からないと言うのか」。「～ねえろ」→「～ないだろう」。「～なんだすけの!」→「～なんだからな!」。「おめ」→「おまえ」。「～だかの」→「～だから(なあ)」。

[引用3]

「休まんねて言うてっすけ」→「休むことができないと言っているから」。

[引用4]

「どんげな顔」→「どんな顔」。「～くれや」→「～くれよ」。「言うたろも」→「言ったけど」。「仲間はずれにさったみてで」→「仲間はずれにされたみたいで」。「だつてに」→「だというのに」。「めっぽう」→「とても」。「～すけ」→「～から」。

[引用5]

「ほんね」→「ほんとうに」。「おとと」→「亭主」。「それだてがんに」→「それだというのに」。「あっこてや」→「あることだろう」。「こつと」→「こっち。こちら」。「そうだろも」→「そうだけど」。「それだんが」→「それが」。「あんげに」→「あんなに」。「想像もつかんてば」→「想像もつかないわ」。

[引用6]

「言うてるろも」→「言っているけど」。

[引用7]

「さつてもした」→「しれてしまった」。「思われようば」→「思われようか」。「お前だてや」→「お前だつて」。「余所^{しよ}人みてに」→「余所の人みたいに」。「ならねように」→「ならないように」。「ねかったんだ」→「なかつたんだ」。「だつたろも」→「だつたけれど」。「～だすけ」→「～だから」。「～さつたり」→「～されたり」。「見下げらつて」→「見下げられて」。

「触れ回られとねがった」→「触れ回られなくなつた」。「噂になりとねがったんだ」→「噂になりなくなつたんだ」。「言われんねば」→「言われなくなれば」。

[引用8]

「分がった」→「～分かつた」。「言うこど」→「言うこと」。「言わたつたら」→「言われたら」。「ちいっと」→「ちょっと。少し」。「長かつたろつかね」→「長かつたかもね」。「いね」→「いねえ」。「言わんなる」→「言われなくなる」。「あつかんだ」→「あるんだ」。

参考文献

新村苑子 2015. 『葦辺の母子 新潟水俣病短編小説集Ⅱ』 玄文社。

柴田毅実 2012. 「新潟弁で書かれた『苦海浄土』、新潟の一冊」『新潟日報』11月2日。

後藤岩奈 2016 「新潟水俣病の苦悩細やかに 新潟の一冊」『新潟日報』4月3日。

後藤岩奈 2019 「新村苑子『律子の舟 新潟水俣病短編小説集Ⅰ』について」国際地域研究学会

編『国際地域研究論集』第10号

平成24年度新潟県立大学公開講座『阿賀野川流域から世界へ』記録集 新潟県立大学地域連携センター、

資料「水俣病の症状」 新潟水俣病阿賀野患者会。

注

- 1 新潟県立大学国際地域学部 (iwana@unii.ac.jp)
- 2 新村苑子『律子の舟 新潟水俣病短編小説集Ⅰ』(玄文社、2012)、奥付の著者紹介より。
- 3 新村苑子『葦辺の母子 新潟水俣病短編小説集Ⅱ』(玄文社、2014)、6頁。
- 4 同上、17～19頁。
- 5 同上、34～36頁。
- 6 同上、55～59頁。
- 7 同上、156～158頁。
- 8 同上、224～225頁。
- 9 同上、234頁。
- 10 同上、237頁。
- 11 2000年10月14日、新潟水俣病共闘会議主催の現地調査において、安田公民館での患者さんとの交流会で、「安田患者の会」の権平晴雄さん語る。また権平さんは2008年2月16日の新潟水俣病市民講座「阿賀野川とともに生きてきた人々」の講演でも同様のことを語っている。
- 12 2018年8月13日、新潟市総合福祉会館において開催された、新潟水俣病阿賀野患者会主催の「新村苑子著『新潟水俣病短編小説集』を読み解くゼミナールPARTⅡ」(以下「ゼミナールⅡ」と略記する)での討論。この討論には作者の新村氏も参加、発言された。なお酢山省三氏も、同じく関川智子医師からお話を伺ったとのことで、「夫婦生活の障害が理由で離婚したとか、子供ができないから実家に戻された等のことが、頻数は分からないが、事実としてある」とのことである。
- 13 一方で、新村作品のリアリティーの欠如を指摘する見方もある。前掲「ゼミナールⅡ」での討論の中で、参加者より、「「長い留守」中の昌平と秋子が20年も連絡をとらなかったという設定は、リアリティーがない」という発言があった。また本稿の元となる「第14回水俣病事件研究交流会」における筆者の報告の後に、熊本日日新聞文化部の農孝生記者が筆者に取材し、さらに後日新村氏にも取材して、作品集を紹介する記事が同紙に掲載された。この記事の中で、患者らと付き合いの深い支援者の、新村氏の小説に対する、「作られた感じが気になって素直に受け入れられない」という声を紹介している。なお、「新潟県立環境と人間のふれあい館」(新潟水俣病資料館)の塚田眞弘館長の、「プロの作家ではないが、水俣病のことをよくぞここまでまとめて小説に仕上げたと思う。その勇気がすばらしい」というコメントも紹介している。「新潟水俣病 初の小説出版 新村苑子さん創作 土地の言葉で患者描く」『熊本日日新聞』2019年1月23日